

付けられているものである。<sup>(6)</sup> B～F-2～4区に広く分布する土器6・15・17～21は、出土量も多く、分布域も遺跡の中心を占める。土器20は早水台式土器に該当し、<sup>(7)</sup> 土器15を除く他の土器もほぼ同時期と考えられよう。土器26については、宮崎学園都市遺跡群の清武町・入料遺跡に関連資料が見られる。<sup>(8)</sup> 入料遺跡例は、外反する口縁部の破片で、外面と内面の上部に二段RLの縄文を施す。いずれも押型文土器に伴う縄文系の土器であろうか。

石器については、繰り返し述べる通り、磨石・石皿が皆無であった点が重要である。また、磨製石斧が1点のみであることも挙げねばならない。いわゆる鋏形鏃、異形局部磨製石器に類似するものなど、押型文土器に伴うとされる石器が出土しているが、土器の型式（様式）と共伴する石器の形態、組成の関係も今後詳細に検討していかなければならない。

## 2. 縄文時代早期の集石遺構について ―東部九州南半地域の資料の検討―

今まで使用してきた、そして以下で言う東部九州南半は、ほぼ現在の宮崎県域を指し、早期を中心とする九州の縄文時代の集石遺構について考察した、徳永貞紹による地域区分を踏襲している。<sup>(9)</sup> 徳永は、当地域については不確定要素も多いものの、掘り込みを持ち、配石を持たないAⅡ類から掘り込みの無いB類への時間的変化が読み取れるとしている。

不確定要素は主に土器編年であるが、その精度の問題もさることながら、集石遺構の性格上、土器による所属時期決定が困難であることや、複数の生活面の重複も問題の解決を困難にしていると言えよう。また、調理される食物の種類により集石遺構の形態が異なるという民族例からは、それらの共時的な追求を迫られる。<sup>(10)</sup> さらに個々の礫群が、いかなる作業段階に所属するののかという弁別が技術的に困難なことも挙げられる。作業過程への照射は、早いところでは小葉一夫によってなされたが、<sup>(11)</sup> 当地域においても近年、種々の段階の集石遺構の検出例の指摘がなされるようになった。Fig. 44は宮崎学園都市遺跡群の宮崎市・前原西遺跡で検出された土坑である。<sup>(12)</sup> 礫群層の下部、集石遺構に近接して存在し、埋土中に炭化物を含むが焼礫は見られない。同様の遺構は東隣の前原北遺跡においても検出され、報告者は「集石の形成そして廃絶の過程の各段階を示す」可能性を指摘している。<sup>(13)</sup> さらに同じく宮崎学園都市遺跡群の清武町・田上遺跡においても、検出された集石遺構について、それぞれ準備礫から廃棄礫に至る各段階に想定している。<sup>(14)</sup> それらの指摘を受け、まとめるならば、前述の視点の欠如した分類・編年では、結果として、例えば集石遺構の完成形態と準備礫・廃棄礫の集積を同一の組列上で扱うといった誤りをおかす危険性が大きい、と言えよう。

以下においては、その点を踏まえ、さらに、<sup>(15)</sup> 田野町・前平地区遺跡群のように、出土土器から複数の期間にわたって存続したと考えられる遺跡を避け、形成期間の短い当地域の遺跡の集石遺構を見ていくことによって各土器型式の段階ごとの特徴を捉えていきたい。

<sup>(16)</sup> 宮崎市・前原西遺跡 (Fig. 44-1・2)

前出の遺跡である。アカホヤ層下の黒褐色ロームから前平式土器を中心とする縄文早期土

器が出土した。集石遺構は12基で、全て土坑を持つものである。前述の焼礫をほとんど含まない土坑もその中に計上されている。また土坑の最下部に扁平礫を置くものが3基存在する。

野尻町・梯遺跡<sup>(17)</sup> (Fig. 44-3)

Ⅱ章で触れた、本遺跡の近隣の遺跡で、アカホヤ層下の暗褐色ローム層で23基の集石遺構が密集して検出されている。土器は山形・楕円の押型文土器、櫛目状の貝殻腹縁による平行沈線を施すものなどが出土しており、本遺跡と遺跡形成の時期が一部重なる。集石遺構は、掘り込みを持つものと持たないものの両者が見られるが、数的には前者の方が多いようであり、その中には掘り込み最下部に配石を有するものもある。

高鍋町・水谷原遺跡<sup>(18)</sup> (Fig. 44-4)

アカホヤ層直下で集石遺構が6基検出され、それに伴って土器片が出土しているが、ほとんどが塞ノ神式土器であったという。集石遺構は、全て明瞭な掘り込みを持たず薄く焼礫が堆積する形態のもので、うち5基は披熱の度合いが低く使用頻度があまり高くないものとされ、6号の1基のみ、礫の下部に灰の堆積層があり、その場で加熱した痕跡があるとされる。また、1号は円礫主体であり、6号には円礫が多数混じるが、他は破砕された角礫のみであった。以上のことから、報告者は6号が礫供給源として機能し、他所に運搬され使用された可能性を指摘している。

以上、3遺跡の集石遺構の在り方について見てきた。前原西遺跡を縄文時代早期前葉、梯遺跡を早期中葉、水谷原遺跡を早期後葉と位置付けると、掘り込みを持つものから、持たないものへ変化するという徳永の見解が追認できる。また、宮崎学園都市遺跡群の宮崎市・堂地西遺跡<sup>(19)</sup>の調査では、熱ルミネッセンスによる年代測定から同様の結果を得ている。ただし、円筒形土器系・押型文土器期までの資料は比較的多く見られるものの、塞ノ神式土器期の資料は少なく、水谷原遺跡例も、6号以外は廃棄礫、再使用のための準備礫を含むと考えられる。ここでは参考例として串間市・開尾遺跡<sup>(20)</sup>の例を追加しておく。開尾遺跡からは若干の円筒形土器も出土しているが、主体となるのは塞ノ神式土器であり、28基検出された集石遺構のうち掘り込みを有するものは2基のみであった。薄いレンズ状の堆積を示すものが多い。

このように、現段階では塞ノ神式土器期の集石遺構については掘り込みの不明瞭化の傾向が認められよう。その現象の背景については今回の論題からはずれるが、塞ノ神式土器における、大形土器の出現を含む形式（器種）分化に注目しておきたい。これについては雨宮瑞生・松永幸男が法量の数量化を行ない、用途の多様化の可能性を指摘しているが、塞ノ神式土器期における集石遺構のより簡略な在り方を、形式（器種）の多様化という現象と重ね合わせると、食文化における礫の相対的な比重の低下と捉えることが可能になる。あるいは、集石遺構が「食」の中でも祭祀的位置を占めるものであったとする上田典男<sup>(21)</sup>の見解を検証していくことで、この遺構の継続期間の長さの解釈が可能になるかも知れない。

紙数の関係もあり、考察と銘打ちながら粗いものになってしまった。機会を見つけて再考したい。また文中では敬称を略している。末尾ながら先学諸氏に対する非礼を心よりお詫び申し上げたい。

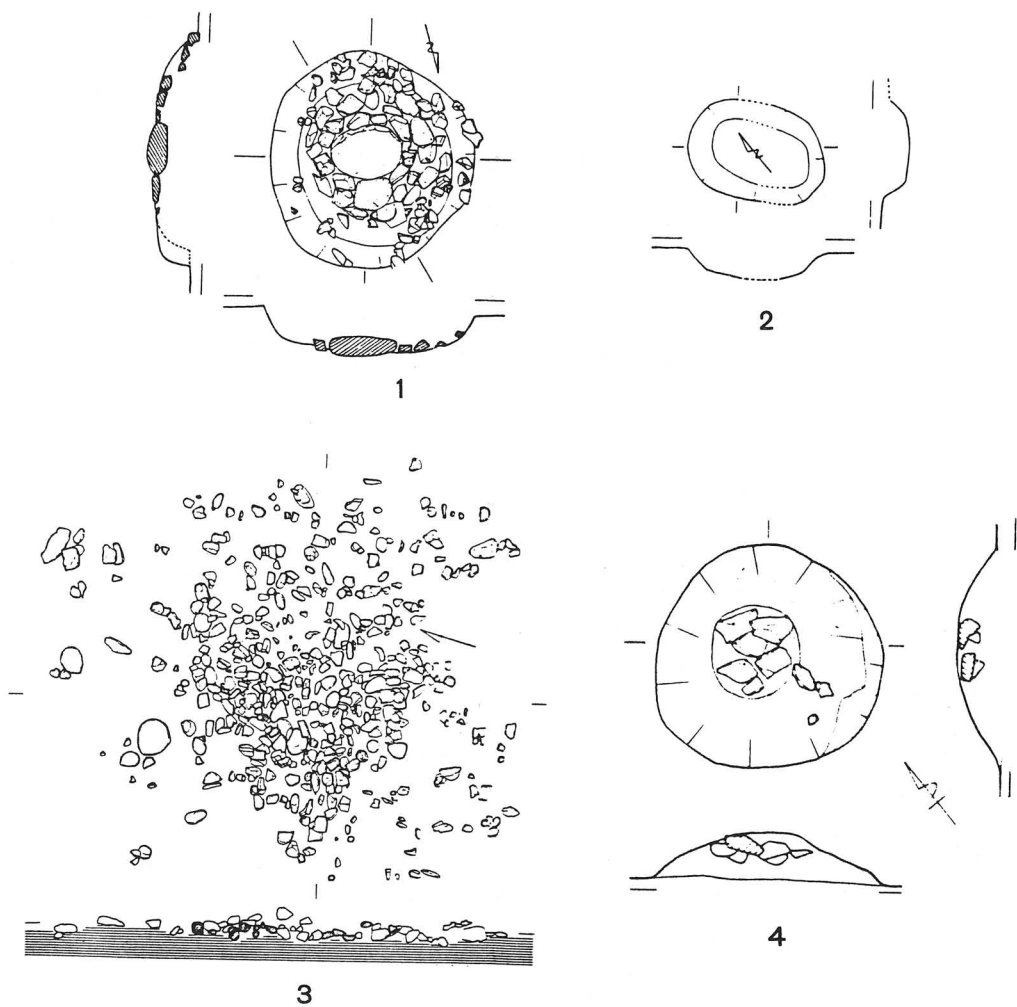


Fig. 44 各地出土集石遺構 (縮尺不同  
出典は各報告書  
一部改変)

〔註〕

- (1) 新東晃一 1980 「火山灰からみた南九州縄文早・前期土器の様相」『鏡山猛先生古稀記念古文化論巧』 同書刊行会  
ただし、幸屋火砕流の及ばなかった当地域においては「死滅」といった影響ではなく、気温の低下による生態系の変化といった、二次的な影響があったのではないか。
- (2) 米倉秀紀 1984 「縄文時代早期の生業と集団行動—九州を例として—」『文学部論叢』15 熊本大学文学会  
本遺跡の石鏃／磨石・敲石の指数は、14.00とかなり高くなる。
- (3) 戸高真知子他 1991 『高鍋町文化財調査報告書第5集 大戸ノロ第2遺跡』 高鍋町教育委員会
- (4) 河口貞徳 1955 「鹿児島のおいたち —先史時代—」『鹿児島市史』  
新東晃一 1989 「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観』1 小学館  
今回当該期の基礎編年として新東（1989）編年を用いたが、それによれば、前平式土器は古く位置付けられる。土器1の位置付けは検討を要するところである。口縁部に文様を集約させるものは、複数の型式が存在し、比較的長期間存在したということは考えられないだろうか。
- (5) 新東晃一 1989 「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
- (6) (5)に同じ
- (7) 1983 『大分県史』先史編Ⅰ 大分県
- (8) 岩永哲夫他 1980 『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（1）』 宮崎県教育委員会
- (9) 徳永貞紹 1990 「九州の縄文時代集石遺構 —研究の現状と課題—」『肥後考古』 肥後考古学会
- (10) 印東道子 1976 「トラック諸島の石焼料理」『えとのす』7 新日本図書
- (11) 小葉一夫 1979 「縄文時代における焼石遺構」『小田原考古学研究会会報』8 小田原考古学研究会
- (12) 面高哲郎 1988 「前原西遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第4集』 宮崎県教育委員会
- (13) 北郷泰道 1988 「前原北遺跡」同上
- (14) 菅付和樹・谷口武範 1985 「田上遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第3集』 宮崎県教育委員会
- (15) 面高哲郎・寺師雄二 1986 『田野町文化財調査報告書第3集 芳ヶ迫第1・第2・第3遺跡・札ノ元遺跡』 田野町教育委員会
- (16) (11)に同じ
- (17) 面高哲郎 1981 「梯遺跡発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』24 宮崎県教育委員会
- (18) 近藤 協 1988 『水谷原遺跡』 宮崎県教育委員会
- (19) (5)に同じ
- (20) 永友良典他 1985 「堂地西遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集』 宮崎県教育委員会
- (21) 吉本正典 1989 『串間市文化財調査報告書第2集 開尾遺跡・留ヶ字戸遺跡』 串間市教育委員会
- (22) 雨宮瑞生・松永幸男 1991 「縄文早期前半・南九州貝殻文円筒形土器期の定住的様相」『古文化談叢』26 九州古文化研究会
- (23) 上田典男 1983 「縄文時代焼礫集積遺構の形態的把握」『物質文化』41